



# 信州上田原町問屋日記にみえる定飛脚について

藤村潤一郎

信濃国上田宿は北国往還にある。同宿に関する定飛脚について、昭和一五年一月刊、藤沢直枝著、上田市編「上田市史」上巻<sup>(1)</sup>には、定飛脚渡世出願として、文化八年正月に上田原町の富士屋料右衛門の弟治助と、同町綿屋喜三郎の弟太兵衛の兩人が、各兄、親類連署の上で、毎月五、一五、二五日の三日毎に定飛脚を出願した。原町問屋は願書を藩に取次いで聞濟になり、出願人は旅立届は不用で口上のみでよいと認められたとし、その後の成績については見るべき史料がないと記している。

さらに「定飛脚旧記」により、安政三年二月に飛脚問屋島屋佐右衛門の請願を許し、中山道追分宿から北国往還經由により善光寺に出て、越後新潟に達する毎月三回往復六回の定期飛脚が開始されたが、この飛脚が上田宿にも相応の便宜を与えたと記している。

前者については典拠を示していないが、上田市原町滝沢佳氏所藏原町問屋日記によると推測される。後者は定飛脚旧記によっているが、これは明治一四年九月、駅通局御用掛青江秀編次「大日本帝国駅通志稿考証」<sup>(2)</sup>の安政三年の項に

○三年二月飛脚問屋島屋佐右衛門ノ請願ヲ以テ中山道追分宿ヨリ善光寺ヲ経テ越後新潟ニ達スル毎月三回往復六

回ノ定期飛脚ヲ許ス会符提札及各駅其勘合印ヲ付シ定賃錢ヲ以テ人馬通伝ヲ許ス事東海道ノ如シ定飛脚  
旧記  
とあるのによつたと考えられる。前述の原町問屋日記は信濃国小県郡上田原町問屋日記として国立史料館でマイクロフィルムにより収集されているので、これにより上田宿における定飛脚について史料紹介をする。

### 一 京屋定飛脚取次所

文化八年未正月吉日、瀧沢助右衛門「日記」によると、同年正月付、瀧沢助右衛門、町年寄衆中宛、原町富士屋料右衛門方治助、同町綿屋喜三郎方太兵衛、治助兄料右衛門、太兵衛兄喜三郎「一札之事」には、治助と太兵衛が毎月五日、一五日、二五日の三度の定飛脚渡世を出願し、「御他家御絵府」と苗字帯刀の件は勿論その他の点についても少しも權威をふりかざさない。宿継荷物持参の往来には他の商人と同様に宿々の問屋に藏敷を払って通行し、夜道早立などはしない。なお遠国他国迄の金子荷物を引請ける際には、親類と共に異変に対処し、領主、町御役所に厄介をかけない。また道中での不法には如何様の御咎でも受けるとしている。

これに対して町年寄と問屋では、定飛脚の件は先例が不明なため評議する迄は、右の下書で伺った処を申付けてもよいとされ、申渡書付の作製に着手した。

つぎにこの定飛脚は毎月出立のため旅立願ではなく、単なる御届で済むように願出た結果、出立と帰着の際には口上で町手代中と町役人に届けるのみでよい事となった。

以上の記述から信州上田で治助と太兵衛の定飛脚渡世が始まったと考えられ、兩人共に兄の家に居る事は、飛脚以外の営業が同族により行なわれていると考えられる。

この営業は三都にまたがる飛脚業者から直ちに注目された。営業は飛脚業者と無関係だったとは考えられないが具

体的な事は不明である。翌々文化一〇年酉正月吉辰、滝沢助右衛門「日記」には同年七月に、先達って上州高崎京屋弥兵衛が信州上田原町の富士屋料右衛門店を借請けて定飛脚所を立てたい旨の申出があった。これは前記の文化八年に富士屋料右衛門の弟治助と綿屋太兵衛が願って既に定飛脚渡世をしている上に、同店で同商売と云う事になるが、治助は出願が許可された場合には渡世をやめる事にしており、太兵衛も差支えないとの事である。また町年寄が上田海野町問屋及び町手代中にも掛合ったが矢張り差支がなく、また事情を申出た書付に高崎役人中の奥書もあったので、証文案紙が富士屋料右衛門に渡された。

ついで同年九月には次の願書が提出されている。即ち御奉行宛、願主原町料右衛門、組合兩人「奉願口上書」であり、料右衛門は上州高崎田町、浄土真宗高崎片町覚法寺旦那京屋弥兵衛から「勝手統」をもって原町料右衛門店を借宅して飛脚取次処商売をしたい旨の内談があった。その際に京屋の宗判は年々高崎宿で渡す事になっていた。そしてこの口上書には高崎の問屋方から書付をとっている。

この他に京屋から同年九月付、松平伊賀守様御城下原町問屋瀧沢助右衛門、町年寄宛、松平右京亮城下上州群馬郡高崎町田町京屋弥兵衛、請人同処近江屋利八「一札之事」が提出されている。内容は

1 (往来) 今回の定飛脚取次所開設を願うについては、往来では作法を守り、宰領の者を差立てた場合でも違反すれば御咎を受ける

2 (上田での渡世心得) 飛脚同様に荷物請負渡世を営む者があっても差支ない。また諸荷物は荷主相對の場合は特別だが、「謂れなき」荷物は引受けない。仰渡された事項に違反した場合には上田を引払い、店をあげて上州高崎京屋に引取る。そして上田での渡世中は何カ年でもこの一札による。

の二項で、終りに上州高崎町問屋年寄の引請け文言がある。この一札の写が御奉行に提出され、他に借宅証文一通

がとられた。これに対して町役人に請合書付の提出が求められた。

即ち同年九月付、御奉行宛、問屋滝沢助右衛門、町年寄宮下九左衛門他五人「差上申御請証文之事」として、内容は上田原町料右衛門が定飛脚宿商売を高崎の京屋弥兵衛に譲る願が聞済になったので、高崎から上田問屋、町年寄に請合証文が出された。この手続が終ったので上田の飛脚宿については上田問屋、町年寄が請合うとしている。

この請合証文は九月二六日に願い通りに申渡された。それに附随して同年九月付、問屋滝沢助右衛門「覚」には、原町治助、太兵衛が定飛脚渡世休業を申出ている。

これらからすれば京屋の上田進出は、現地業者の買収、又は名義換によるものだろう。こうして発足した上田の京屋については、天保一〇年亥正月吉日、瀧沢助右衛門「日記」に召抱の者が金子持逃をした事が記載されているに過ぎない。

それは九月一五日申下刻付、小諸宿が善光寺迄宛、追分宿問屋市左衛門「覚」に、同月一日に召抱の久三郎を京屋弥兵衛は上州相生町から高崎宿同店に、高崎鹿島弥七の金二両入状迄通、京屋市右衛門、利兵衛の書状添天保銭八貫一七二文と、金五三両及び三七四文の目録入状一通の三口を持参させたが持逃をした。彼は年頃三〇歳位で背丈は中肉中背、色は少々黒い方で薄い所もある。衣類は茶替り嶋拾一つに信州袖堅嶋の古半天、襟は黒さやである。脇差は鉄拳で輪が三、四ある。股引脚半、白差甲掛をしている。

各宿で見かけた場合には取押えて、追分宿まで宿継送りで通知するように求めている。結果は明らかでない。道路を通行する飛脚の姿は久三郎と似たものであろう。

## 二 嶋 屋

文化一四丁丑歳六月、滝沢助右衛門「式番日記」には、同年一月一〇日に定飛脚問屋嶋屋佐右衛門代藤兵衛、孫七の兩人がきて、今回初めて北国道中筋請負荷物を月次上下六斎に越後国柏崎迄往返する事に改めたく、ついでには御代官所御用物と商物請負を四駄限り通行したい。普通の商荷物と違い御用物であるから遅くしてはならないので、その点について指支の有無を聞いてきた。

北国街道は江戸から追分宿迄は中山道と同じであり、追分から小諸、海野、上田、坂本、上下戸倉、矢代、丹波島、善光寺、それから柏崎を経由して越後国出雲崎に至り、佐渡に連絡している。

再びもとに戻るが、前記の嶋屋の願に対して、「右御触中山道者道中御奉行所御触も御座候間」、写してみるように申聞かせている。その御触は次のようである。

一定飛脚問屋荷物、定飛脚と認候給付ヲ差、宰領之者共江定飛脚と認候焼印札ヲ為持、宿々江者右札ヲ渡置而引合、宿場定賃錢急度相払往返可致旨申渡候間、其旨相心得、右札ヲ請取置、無相違分者定賃錢請取可継送趣、天明二寅年十一月、寛政元酉年七月相触候処、いつとなく定飛脚荷物、商人荷物同様跡江廻し継立候様相聞候、定飛脚荷物之内ニ者諸向々夫々江差立候御用筋之書翰も有之候条、外々給付荷物茂同様心得、右焼印札引合、無相違分者定之賃錢受取、宿場到着之順次第不留置、宿人馬ニ不限、助郷馬ニ而も早速継送可申者也

丑 主計印

十月

美濃印

中山道中

板橋宿<sup>6</sup>

守山宿<sup>7</sup>

宿々問屋

年寄

川々役人共

文中に見える天明二年の御触は天保一子年二月序、利右衛門「定飛脚問屋願済一件 二ノ冊<sup>(補1)</sup>」と、昭和一二年刊、大森利球治・三沢勝衛「塩尻町誌<sup>(補2)</sup>」に収録されているが、寛政元年の御触は確認していない。つぎに右の御触について、同年一〇月一九日付で諸国代官武蔵の大岡源右衛門が中山道各宿問屋年寄と川々役人に触書の本紙と写に請印帳を添えて遣わしている。いずれにせよこの御触は中山道に関するものだから追分宿は関係するが、上田宿などは対象外になる。つぎに追分宿は北国道中筋継送について、

此度北国道中筋江御請負御荷物御差立被成度段致承知候、然上者御定之賃錢請取、聊差支無之様可継送候、依之致印形候以上

丑十月

追分宿

問屋印

年寄同

と請印している。この書付は上田を含めて小諸から善光寺迄廻文されたが、北国道中で小諸から善光寺迄が組合となっていたからだろう。各宿は組合宿方一同の相談がなくては印形し兼ねる事と四割増賃錢の積りを申合せている。

結局宿の捺印と荷物継立の件は承知されたが、問屋年寄実印は捺印出来ない事になった。書付の追分宿は中山道関

係御触による請印だが、小諸からの各宿は「御触外之義」であり、問屋のみであればよいが、年寄の印形は出来ないと嶋屋側に答え、嶋屋はこれを了承している。

交渉はついで藏敷の問題となり、これは出さない事となった。そして継立のため定駄賃の上に増銭の額を決定しなければ、実際の運行に当る宰領の者が仕事が出来ない。ここでは各宿が追分宿の書付の文面のみでは納得せず、矢張り組合宿方一同の相談が要求された。嶋屋側が各宿に挨拶し、同年十一月付で中山道追分宿、北国道小諸宿、田中宿、海野宿の問屋年寄、及び上田宿問屋（帳場印）が北国道中筋へ御請負御荷物（御定の賃銭により継立てる事を横帳面に宿並実印している。上田宿の北国筋月次往返六斎荷物四駄限往返は重荷であるため、貢目増駄賃銭として同年十一月に上田宿海野、原両問屋が嶋屋に対して、二里半の田中宿へは四一文、二里の海野宿へは二三文、三里六丁の坂本宿へは五一文とし、他に馬士は増銭を求めてはならない事になっている。

「塩尻町誌」<sup>(補3)</sup>によると、天保二二辛丑年三月付、中山道宿々問屋衆中宛、嶋屋佐左衛門・京屋弥兵衛「口演」を記した帳面が、宿方に出された。即ち文化一四年の御触の趣意通り継立る宿方は調印、しからざる宿方は下げ札をする事にし、宰領惣代兩人が持参しているから、その他に早着するように相談を求めている事実がある。

安政三辰年、瀧沢助右衛門「日記」には、同年三月二五日に越中薬商人荷物往来について上田宿横町勝太郎宅で、軽井沢から善光寺迄の宿が会合し、今回嶋屋佐右衛門定飛脚御免についての宿々に御触流があった点につき相談が行なわれた。明治期の「法規分類大全」<sup>(3)</sup>に「中山道ヨリ新潟迄島屋佐右衛門荷物ハ著順次第継立セシム」として

安政三丙辰年二月十五日（駅通志料抄録）

瀬戸物町

市右衛門借地



## 島屋佐右衛門

右者中山道板橋ヨリ追分宿、夫ヨリ北国善光寺通り越後新潟迄飛脚荷物継立ノ儀、一箇月三度往返六度宛、以来相定メ最定飛脚と記シ候絵府ヲ指シ、宰領ノ者モ同様認候焼印札ヲ為持、宿々ヘモ右札ヲ渡シ置キ引合、宿場定ノ賃錢急度相払、往返可致旨申渡間、其方宿々ニテモ右之趣相心得、右焼印札ヲ請取ニ合セ相違ナキ分ハ、御用物ハ勿論其外ノ荷物ニテモ著順次第不留置、宿馬ニ不限、助郷馬ニテモ早速可継送者也

## 御勘定奉行

必らずしも正確な写とは考えられないが、中山道板橋から追分、ついで北国道經由新潟迄の定飛脚を嶋屋に命じたものである。

再び「日記」によると、嶋屋名代がきて宿々に鑑札を渡し、賃錢沓錢とかで賃錢を沓割五分増にする事の受印を取った。宿側としてはこれについての議定がないので、将来問題が起った場合に対処するため、評議の上で内規定書が作成され、宿々に沓通宛預かる事にした。前記増錢などは帳場で控えている。

規定書は安政三年辰三月二六日付で、軽井沢、沓掛、坂木の各宿問屋、上戸倉下戸倉両宿代下戸倉宿年寄、矢代、丹波嶋、善光寺、追分、小諸、田中、海野、上田の各宿、町の間屋が取替したもので、内容は次の通りである。

(Ⅰ) (前書) 今回新潟御用の便利のため一カ月に往返六度宿場定の賃錢で、宿到着次第に宿馬、助郷馬いずれに抱らず直ちに継送る事を江戸瀬戸物町定飛脚嶋屋佐右衛門に仰付けた御触書により、嶋屋代人から宿々へ対談が行なわれた。将来商人荷物を交えて運行の場合には、困窮している宿々は助成を失ない、御伝馬持主は潰れの原因となるから、今回善光寺町から軽井沢宿迄が上田宿で会合し次のように定める。

(Ⅱ) (馬継増の場合) 新潟及び佐渡の御用を出雲崎表から出した場合以外に、途中から馬継増になった時は、直ちに会

合して宿相続が出来るよう奉行所に訴える事。

(3) (定飛脚取次) 定飛脚往返は国々の便利のためだから、商人荷物を除き小包書状などを、取次所では善光寺町、上田町は老度に四貫目、小諸町は二貫目、他の宿々の取次所は一貫目限り世話をする。なお商人荷物を交えてはならない。

(4) (継立駄数) 嶋屋の荷物継立方は老度に五駄迄とするが、将来これが増加した時は会合の上直ちに訴える事。

(5) (間立、新規) 将来、今回の日数以外に間立を求められても応じない。また新規日数の願があった時は、宿々助郷が一致して難渋する事を訴える。

(6) (結び) 宿々が取極めた上はこれに違反しない事。

以上の項目は定飛脚について一般的な宿側の規定と考えられる。なお新潟奉行は天保一四年からであるから、特に安政三年は定飛脚御免とは関係ない。この御触の契機は不明である。

この規定書に關係する事件が翌年起った。安政四巳年、滝沢助右衛門「日記」の閏五月一三日の条には、嶋屋定飛脚が同年五月に上田宿で原町が月番の時に縮荷物を持参した。北国道中を南下して来た途中の宿々では相對賃錢を受取ったとの事であつたから、上田宿では倍増賃錢を受取つて繼立てた。ところが中山道に入つて輕井沢宿では差止め給符を引上げ詫書を取っている。それは安政四巳年五月一七日付、中仙道輕井沢宿問屋市左衛門宛、新潟飛脚嶋屋佐右衛門取次山田惣左衛門才領徳兵衛、当宿定宿加判六右衛門「差出申一札之事」である。

内容は新潟飛脚嶋屋は今回越後国柏崎から縮荷物七駄に、二つの定飛脚の給符をつけ、宿々相對賃錢を払つて輕井沢宿迄来たら荷物預り差留になつた。その理由は新潟飛脚は新潟の御役所から江戸へ往返の御用物のためものだから、新潟からの書状等を持添えて通行すべきであるのに、他所出の荷物を持参したのは嶋屋と飛脚会所の誤りであ

り、本来は道中奉行所に訴出るべきだが内分にし、駄賃帳と荷物絵府二八枚を是迄前の宿々を偽って通行したとして軽井沢宿が預かった。

この事件は商人荷物と定飛脚絵府の問題で、上田宿などは倍増賃錢で通し、軽井沢宿は差留めた事が示すように、運用面で定飛脚の解釈は流動的である。以後各宿で何様に調整したかは明らかでない。

つぎに嶋屋か京屋か不明であるが京都からの定飛脚が途中、荷物を紛失している。即ち同年七月付、御奉行宛、町年寄・間屋「御届書」によると、京都小池八幡町越前屋弥右衛門から上田の原町成沢新六方へ定飛脚便で、荷物沓箇と小包五つを長瀬村馬士文作が七月六日附できて、下塚迄は確認しているが、それから上田迄の間で小包沓つが紛失したと新六が届けた。

具体的な事は明らかでないが、この運送は元禄一五年刊、都乃錦「沖津しら波」四の「大坂乃飛脚、宮の長蔵(4)似せ荷事」に、美濃に妻を持ち尾張に住む高持百姓の長蔵が没落して、女房を舅にあずけ尾張国宮宿の間屋に赴き

いくくの雲もさはりなきかげも丸とし十年切て。銀子貳百目たしかに手取の身は襦籠はちかこを昇。馬追歩行荷の差別なく。親方のいひ付をつとめさせもが露ほども奉公ほうこうに如在ごといなく。門はき瀬戸せとはき庭の掃持さうじにいたるまで働事はたらく。を四年程続けたが次第に往来の旅人に対して小賊をし始めた。

ある時御用御引替銀かへと会符あひふにしるして十貫目のむしろ包三ツづ、馬に付け已上七駄いじしちだ。大坂三度才料さいりょうして江戸へ下りけるを(下略)

長蔵は「旦那の馬をやりばなし」宮から先の舞坂と浜松の間に似せ荷を作くって隠しておき

さて海道江出て銀荷かねにの来るをまち居たり。案のごとく三度飛脚真先に。こくくと居眠りながら乗通れば。跡よりつゞいて銀荷七駄だはなをそろへてみへ来るを。長蔵はなさぬかといへば先の馬子付てこひとてやがて長蔵が馬

に銀を付させ。上りの旅人にむかひ舞坂江安ふして戻り馬遣ふとて右の馬子はかへり過ぬ。さて長藏半道ばかり馬を追て三度の才料にむかひ。

長藏は馬に粥を飲ませるから宿に行くと言ひ、才料は茶屋で休む。長藏は宿に行く振りして林の中で似せ荷と金荷をかえ、会符はそのまま指して現られ、才料は再び馬に乗る。長藏は途中で消るが他の馬子は記憶せず、見付宿に着いて夜半まで待つが長藏は現われず、荷物を点検して「飛脚仰天しそのまゝ問屋江付こたへして」「御の字の光を以てせんぎ」して發覺する。

勿論上田宿の定飛脚とは事情は異なるが、駄送の際の才料と馬子の関係、馬子どうしの間は、この浮世草子と似たものだったろう。

ところで北国道中での定飛脚の姿については、昭和四〇年三月刊、宮川嫩葉執筆「柏崎ちぢみ史」<sup>(5)</sup>は、「特に木曾街道の飛脚は飛ぶ鳥をおとす勢いであつたし、各荷幸領格は名字帯刀をさしゆるされ、大いに威厳を示したもので、御用絵符は表に御用会符、裏に会：御役所と書き、縦一尺六分、巾二寸三分、厚五分であるとしている。これは嶋屋の定飛脚ではあるまいか。

この他に縮布荷物は毎年賃錢と継立方を宿場問屋と協定し、嘉永以降は雲助が賃増を要求し運送の延滞のため縮布問屋が江戸奉行に願書を出したとしているが、この運送には嶋屋以外の在地の江戸飛脚も関係していると思われるので後考にまきたい。

街道における嶋屋の駄送荷物は、文化發西初春（二〇年）十返舎一九著、月曆画「方言修行金草鞋四編木曾路巻」<sup>(6)</sup>（題簽「諸国道中金の草鞋 四」）の本庄の所に第一図のように示されている。荷物に見える令の店標は嶋屋のものである。上田でもこのような姿が見られたろう。



第1図 嶋屋取扱駄荷図

新潟については昭和二年八月刊、高崎市編「高崎市史」<sup>(7)</sup>に、明治三年一〇月に「信州通り、三国通り越後新潟迄月々二、七、四、九ノ日飛脚往還始メ、板鼻迄馬一疋二貫文、金古迄二貫五百五十文、倉賀野迄一貫百五十文トシ、吉村甚衛手代莊次郎、西村仁三郎手代半七之レヲ取扱フ」とある。

「駅通明鑑」<sup>(補)</sup>巻四第四篇には、明治三年七月九日付の触書案があり、通商三会社頭取開拓御用達兼（和泉屋）吉村甚兵衛が中山道追分駅よりと、三国通とで新潟迄の飛脚を聞届けられた旨を、板橋―追分―新潟間と高崎―新潟間の宿村に宛てたものである。

文政一〇―一二年刊と推定される上州金古宿、松屋秀吉「諸業高名録」<sup>(8)</sup>には、三国通渋川宿上町入口南側の御泊宿青木勘右衛門が定飛脚問屋嶋屋佐右衛門取次所とあるから、三国通にも嶋屋は営業していたのではあるまいか。なお三国通金古駅の松屋秀吉は御飛脚商人衆御休泊定宿で、諸国妙薬売弘所でもある。

### 三 諸国道中商人鑑と飛脚

信州上田宿の定飛脚については、京屋が上州高崎京屋の一種の支店であるが、その借店している富士屋、また関係する綿屋の具体的な姿は明らかでない。嶋屋の上田宿でのあり方も又明らかでない。それで文政八年乙酉冬、晋米斎司馬全交序、文政一〇年亥春、竹野半兵衛・壺井円水撰「諸国道中商人鑑」<sup>(9)</sup>中山道之部カと中仙道善光寺之部<sup>(10)</sup>の一部とを、文化二年乙丑、邑井（京屋）「大細見」<sup>(11)</sup>と対比して考えたい。以下「諸国道中商人鑑」の飛脚関記事を紹介し、これに「大細見」の關係人名を「」で附記する。なお「大細見」は幕末迄使用されたと推測される。

（板橋）「吉川名左衛門」

和泉屋所左衛門 三度飛脚定宿 （式割増問屋、御休泊仕候）

信州上田原町問屋日記にみえる定飛脚について（藤村）

(藤)〔岡田五郎右衛門〕

梅屋次郎右衛門 諸国商人衆御荷物附送仕候 (酒肴御奈良茶所)

林源兵衛 御荷物式割増問屋 (御泊宿)

(浦和)〔星野權兵衛〕

(大宮)〔大野甚五兵衛〕

清水平右衛門 加州三度宿 (脇本陣、御泊宿)

(上尾)〔友光清兵衛〕

(桶川)〔内田源右衛門〕

(鴻巣)〔立川四郎兵衛、改小池三太夫〕

田村屋久六 諸国商人衆御荷物御繼立仕候 (御茶漬御酒肴御休所)

(熊谷)〔石川藤四郎〕

(深谷)〔中屋忠左衛門〕

近江屋彦右衛門 京都紀州月並、加州富山三度、越後信州飛脚定宿 諸御飛脚商人衆御泊宿

中屋忠左衛門 諸国江金銀御荷物御取次所 嶋屋京屋并商人二割増荷物問屋 (脇本陣、問屋名主)

(本庄)〔中屋伝右衛門、改読不明〕

油屋清八 嶋屋京屋金銀荷物書状御取次所 (山本山御茶漬、御休所)

角屋次兵衛 上州御飛脚様方上州郡村々御不案内之御方江者私方にて委敷御案内仕候 (御待合、御休所、旭御茶漬)

(新町)〔脇本陣三股武兵衛〕

三俣武兵衛 (脇御本陣)

(倉賀野)〔須賀喜太郎〕

須賀喜太郎 (脇御本陣)

(高崎)〔京屋弥兵衛〕

田嶋屋藤兵衛 越中富山<sup>三度</sup>定宿 (御泊宿)  
商人

穀屋勘七 御飛脚加州金沢、越後長岡、糸魚川、与板、三根山、信州松本、飯山、上田、松代御定宿 (御泊宿)

(板鼻)〔藤屋五左衛門〕

藤屋五左衛門 定飛脚御宿 (御泊宿、江州日野、八幡、中郡商人定宿)

(安中)〔須藤内蔵之助〕

(松井田)〔藤屋治左衛門、改湊屋吉兵衛〕

(坂本)〔酒屋甚兵衛〕

加賀屋利右衛門 <sup>加州</sup>富山<sup>三度</sup>衆御定宿 (御泊宿)

酒屋甚兵衛 定飛脚定宿 (御泊宿、脇御本陣)

(輕井沢)〔佐藤六右衛門〕

京三度や六右衛門 京都江戸大坂定飛脚定宿 (江州日野八幡商人御定宿、江戸京都御具服御定宿)

亀屋万右衛門 信州越後御飛脚方定宿 (御泊宿)

さそや 中之條御飛脚宿 (松代様御定宿、木曾荷物請払所佐藤伊兵衛)

信州上田原町問屋日記にみえる定飛脚について (藤村)



〔沓掛〕〔葛屋清藏〕

つたや清藏 江戸 呉服御店  
京都 定飛脚  
大坂 定宿 (御泊屋、脇御本陣、所々種売衆定宿)

〔追分〕〔槌屋市右衛門〕

林屋久右衛門 上田  
善光寺飛脚定休  
飯山 (越後衆中定休、二八そぼうどん 即席御茶漬)

ひのや平助 越後 御飛脚方定宿  
信州 御飛脚方定宿  
木曾 商人衆定宿、御嶽山 上州 講中 定宿 (御泊宿、越中富山 商人衆定宿、松本 東講 商人衆定宿、江州日野八幡中郡商人衆定宿、

高遠 商人衆定宿、御嶽山 上州 講中 定宿)

〔小田井〕〔問屋八右衛門・治部右衛門〕

〔岩村田〕〔問屋辰五郎〕

〔塩名田〕〔問屋新左衛門・又左衛門〕

〔八幡〕〔問屋五左衛門・八郎兵衛〕

〔望月〕〔御本陣〕

〔芦田〕〔藤屋五右衛門〕

藤屋又左衛門 嶋屋 定飛脚定宿  
京屋 定飛脚定宿 (脇御本陣)

〔長久保〕〔笹屋善左衛門〕

笹屋善左衛門 嶋屋 定飛脚御定宿  
京屋 定飛脚御定宿 (脇御本陣、江州日野八幡中郡商人衆定宿、越中富山商人衆定宿)

〔和田峠〕〔木屋郷右衛門〕

土屋藤八 御飛脚衆・江州日野八幡中郡商人衆・御嶽山講中定休所 (諸御大名様御小休所)

木曾屋安次郎 嶋屋 定飛脚衆御休  
京屋 定飛脚衆御休 (諸国商人衆木曾職人衆駒嶽山講中定休所)

近江屋六兵衛 定御飛脚京江戸大坂江州其外商人衆御休泊所

小口屋金右衛門 御飛脚様方御休泊所 諸御大名称御小休所

(下諏訪) (岩波太左衛門)

(塩尻) (三度屋彦治郎)

扇屋孫右衛門 苗木御飛脚定宿 (商人宿)

(洗馬) (志村勘之丞)

(本山) (白木屋佐一右衛門)

「諸国道中商人鑑」中仙道之部カは本山迄であるので、板橋から本山迄では京屋「大細見」と合致する者では脇本陣が最も多く、問屋、本陣、休所などが他に見えている。高崎には京屋弥兵衛の出店があると解釈すべきであろう。<sup>(12)</sup>

信州上田については「大細見」は、東西上州村々并ニ継銭の項に、高崎より信州上田迄として、(一)金一〇〇両に付五〇〇文、(二)銀一〇〇両に付八〇〇文、曰荷物尅貫目はもとの金額は読めないが、五〇〇文に改められている。四書状老通二四文、因金子入状并小包ものは朱書で老人仕立金尅分ト五〇〇文となっている。他の北国道関係の記述はない。

つぎに「諸国道中商人鑑」中仙道善光寺之部で信州分の飛脚関係は、小諸、田中、海野、戸倉、篠の井、丹波島、善光寺には見当らず、

(上田)

菱屋清兵衛 御飛脚定宿 (江州御宿)

(坂木)

信州上田原町問屋日記にみえる定飛脚について(藤村)

坂井屋儀左衛門 富山三度商人定宿 (御泊宿)

(矢代)

小松屋重右衛門 御飛脚・商人衆定宿 (太物類買次)

右の三者が知られる。上田の菱屋は嶋屋とは関係がなさそうである。北国道の嶋屋については今後なお研究が必要である。

#### 四 諸国飛脚取調

このように「諸国道中商人鑑」によると、各海道には諸種の飛脚の姿がある。少なくとも上田宿周辺に見える各飛脚は江戸との関係の者だから、江戸における飛脚取調によって彼等の有様を見たい。史料の性格上本稿の上田宿に係しないものも含まれている点を了承されたい。

「大坂屋茂兵衛記録」<sup>(13)</sup>には、天保七年夏に大坂屋当主迄五代之旧臣利右衛門(利助)が「諸国飛脚差立候廉御取調ニ付御請答」を記している。その内に天保三年江戸の定飛脚問屋和泉屋甚兵衛代庄助が道中奉行所から仲間の飛脚を差立てる国と、それ以外に、仲間外の飛脚屋に口銭を取って依頼する場合の有無とを聞かれ、仲間寄合の上で次の通り解答している。

即ち天保三辰年四月一七日付、道中御奉行所宛、定飛脚問屋六軒惣代年行事佐内町兵助店甚兵衛煩ニ付代店支配人庄助、差添人室町三丁目林七店<sup>(山田屋)</sup>八左衛門幼年ニ付店預り人利右衛門「乍恐以書付奉申上候」には、

Ⅲ(仲間の諸国への連絡網) 仲間は京大坂と東海道筋国々の往返する飛脚の請負渡世であり、京大坂の同業者を相仕と称し、彼等から五畿内、東山道、南海道、山陽道、山陰道、西国筋に諸家の知行所への用を勤め、又一カ国一

郡限の飛脚幸便等へも海陸共に相対で処理している。

東海道の各駅には仲間の出店か取次所などを設置し、その国々の用向をする。そして近隣の国々の場合には最寄の駅場から継銭を相対できめて置き用向を処理する。また辺土や山岳地域までの雑費、人足銭が懸っても京大坂迄の幸便の価格で処理する。

天明年中に荷物が宿で滞らないように御触があり、以来定飛脚問屋の名目を仰付けられ、以後数回同様の御触が出された。上方筋では飛脚が往来していない国々でも相仕又は出店、取次所などの最寄の地域は用向を処理出来る。

(2) (中山道筋国国と日光道中、奥州仙台迄)

この場合は仲間内の京屋弥兵衛と嶋屋佐右衛門が飛脚を差立て、前項と同趣旨の御触が出されている。各国々に出店、取次処などが設置され、仲間一同の飛脚差立の建前から、口銭をきめておき仲間各飛脚問屋からも京屋、嶋屋に渡している。隣国や最寄の地域へは継銭を相対できめて処理する。

(3) (甲府) 京屋弥兵衛の相仕である京都の近江屋喜兵衛から甲府へ出店をし、甲府と京大坂への定飛脚が往返している。

(4) (水戸御城下、奥州岩城迄) 嶋屋佐右衛門が文政年中以来道中奉行所に願ひ御触が出されている。毎月七の日を三斎定日として飛脚を差立て、仲間一同へ請負い、それを嶋屋に渡して処理する。

(5) (越後国水原迄) 嶋屋が用向を引請け、その街道筋の駅へ相対で継送をしているが、定日の御触流がない街道筋のため、仲間一同では請負方はしない。

(6) (その他) 北国筋へは加州様御飛脚会処があり、御国用を処理している。その他に甲府往返の飛脚定宿及び越

後、信濃と近国を往返する飛脚宿で用向を請負う者がいるので、これらの取扱地域へ得意先から頼まれた場合などには、相対の駄賃銭で依頼している。

以上の通り六項目の内五項目は定飛脚問屋、最後の一項目は相仕外以の同業者との提携であり、定飛脚問屋の営業地域について記している。

右の書付を四月一九日に申告した際、道中奉行所から諸国の飛脚一七カ所について、飛脚が諸家の屋敷からか、町の請負人からか、又毎月何斎で、駄数は何程宛廻して通行するかを取調べる事を命ぜられた。

この取調のため定飛脚問屋仲間では、品川宿に和泉屋甚兵衛、大坂屋茂兵衛、山田屋八左衛門が、板橋宿に嶋屋佐右衛門が、千住宿に京屋弥兵衛が赴き、四月二七日に結果を持ち寄り案文を利右衛門が和泉屋で認めた。

それは四月二九日付、道中御奉行所宛、定飛脚問屋一同惣代左内町兵助店甚兵衛煩ニ付代庄助、差添入室町三丁目林七店八左衛門幼年ニ付店預り人利右衛門「乍恐書付を以奉申上候」として次のように記している。

#### 山会津産物飛脚

先年会津領主から道中奉行所に御達の上で、宮崎利助と認めた駄賃帳を持参し、荷物才領は帯刀しており、年中往返している。夏季には駄数を増加する。御国産交易に関係していると推測され、請負人石町四丁目百足屋又兵衛から差立てる。

#### ②加州三度飛脚（富山三度飛脚）

前書同断、即ち領主から道中奉行所に達した上で月三斎往返し御国用の飛脚であるようで、本郷六町目に会処がある。百姓町人からでも依頼があれば請負う。富山三度と云うのもあるが、いずれも荷物才領は帯刀し元締町人の請負である。

③尾州岐阜三度飛脚

江戸からの飛脚往来をしていない。

④濃州大垣三度飛脚

領主手限の乗輕尻で足輕衆兩人が差添い、毎月一兩度宛飛脚往返である。

⑤信州上田飛脚

月何斎という事もなく足輕体の者が帶刀して往来し、町人荷物も請負う。

⑥信州松本飛脚

兩三年前から始まる。つまり天保元年頃からで、町人体の者が帶刀している。領主御屋敷から飛脚が出立するが、町人請負の荷物は特別に板橋宿まで差出し、そこで飛脚が持添えて宿々の繼立を頼む。

⑦越後長岡飛脚

古着商人から差立てる。何方からとは決まっていないが、多くは富津町たまや久五郎、長谷川町米屋勘藏から差立  
ている。

⑧越後三條飛脚

三条御坊の名目で、定日は決まっておらず、折々通行する。<sup>(14)</sup>

⑨越後柏崎飛脚 毎月往返六度通行で、本石町三丁目山口屋三次郎から差立てる。これは越後柏崎町年寄中村雄右衛門、嘉永七年甲寅歳「公私記録」の十一月にみえる江戸行飛脚渡世の常飛脚谷町九郎右衛門の事か。<sup>(15)</sup>

⑩紀州三度飛脚

先年から街道筋では忍冬酒之飛脚と云われている。紀伊様御用達赤坂裏伝馬町玉屋十五郎から九の日が定日で差立

て、一度に荷物六七駄程宛を廻し荷物才領は帶刀である。二月から一〇月迄は中山道往返し、一〇月から翌二月迄は東海道往返である。領国の百姓町人の商荷物は勿論、京大坂への商荷物も持受け、往返共に伏見駅で荷物を取分け又は持添をする。

① 越前福井三度飛脚

領主御飛脚で毎月一兩度往返し、その御屋敷へ乗込む。

② 尾州名古屋飛脚

近年取締があるのか毎月三度程宛である。領主、家老の判形で東海道筋に御用飛脚を差立てる。一度に三五駄限で往返する。

③ 奥州仙台飛脚

仙台御小人飛脚と云い、領主からその時々御触があり、御屋敷から差立て駄数に増減がある。

④ 越後高田飛脚

町人体の者が荷物を才領して処々から差立てる。その住所や名前など判つきりしない。

⑤ 南部弘前飛脚

⑥ 奥州松前飛脚

領主から差立てている。

⑦ 信州大勸化飛脚

二カ所から飛脚を差立てる。三斎宛六度通行し、出所は神田雉子町家主惣右衛門と同弁慶橋相模屋武兵衛の兩人で、善光寺大本願飛脚、大勸進飛脚と称して通行している。

以上で一七カ所の飛脚の取調を終り、最後に江戸定飛脚問屋とこの一七カ所の飛脚便とは、直接荷物を頼む事は全くない。前述の江戸定飛脚問屋の営業地域についての最終項で、仲間外の飛脚便へ得意先から頼まれた場合とか、上方筋からの依頼で北国筋や武州忍、行田辺への歩行飛脚に用向を頼む場合を記したが、これは偶然の事であり、口銭を決めて貰高の荷物を定期的に依頼する訳ではないと断っている。

上田の原町問屋日記にはこれらの飛脚の一部についての記述も見られるが、ここでは今後各宿の問屋日記をみて各飛脚の具体的な姿を研究する事にしたい。

## 註

(1) 藤沢直枝「上田市史」上巻八八三—四頁

(2) 青江秀編「大日本帝国駅通志考証」四一七頁

(3) 「法規分類大全第一編」六七二頁、運輸門二 駅通

幕府統制

(4) 山口剛解説「浮世草子集」(日本名著全集江戸文芸之

部九卷) 四〇二頁

なお文政五年壬午一〇月、飯田利矩序「知新集」六(広島市役所編「新広島市史」六卷二一三—五頁)には、安芸国広瀬組塚本町に貞佐生涯行事の項がある。それには芥河貞佐は備中国笠岡の丸山久右衛門の子であるが、父から金二〇〇両を与えられて勘当され、先ず播州明石の辺で傭人になったり、団子菓子を製造販売したり、ついで「ある別業の番人」になるが、上方に赴いて「大津わたり」に旅人の荷をかたけ、ゆくへとても、とまりとても

信州上田原町問屋日記にみえる定飛脚について(藤村)

定めぬ世を雲助といふ者にもなり、また代神楽の長持を持ち、三井寺の僧につかえ、山科で赤穂義士の内に「なにかしの跡にしろへありてかゝり居」り、その間には「ある日八日傭取の奴となり」、その後は大坂で寺の講供養の肝煎、商家の飯焚などし、結局金二〇〇両には手をつけず帰国したと記している。

これは特殊な例であろうが、雲助は特別の交通労働者ではなく日傭の一種である場合がある事を示している。

また文化七年初演、鶴屋南北「絵本合法衛」序幕(菊池明校訂、広末保編「鶴屋南北全集」二卷三〇一・三一五頁)に問屋人足孫七が道具屋与兵衛に「私めは、あなたの御惣領、瀬左衛門さまに奉公いたし、御恩になりましたものでござりまするが、瀬左衛門さまには、いさゝかの事にて、勘気をかふむり、只今はまことにその日かせぎ。小揚に雇はれ、又は駕にも雇はれ、よふく煙を



たて、命を繋ぎまするうち、「お恥しい住居で、お目には懸られませぬが、これより少し放れて、清水村と申所におりまする」、また高橋瀬左衛門に会うと「アイヤ、いせんは武家のお屋しきに、御奉公した身なれども、旦那の御気に違ひしゆへ、かん当請て今の身は、往来の旅人の肩やすめ、その日ぐらしの旅小あげ」と言う。彼の姿は「同上」二巻二九九頁「脚半、わらじ、小あげのなり」である。これも奉公人が日雇い交通労働者となった場合を示した戯曲である。

つぎに適當な箇所ではないが、文化六己巳年五月、書林大坂河内屋喜兵衛他刊「当用手習状」(下総国相馬郡川原代村池端木村家文書、木村一郎氏蔵)には飛脚に關して、火事見舞として

去月何日其御地出火之趣飛脚屋衆注進驚入奉存候、併貴家様御方角風脇の様子乍去大火之儀不<sub>二</sub>大方<sub>一</sub>御心配遠察仕候、先不<sub>二</sub>取敢<sub>一</sub>御見舞迄如斯御座候

そして、おなじくとして

一筆啓上仕候、然者厥御地近年不<sub>二</sub>承<sub>一</sub>大火夥敷御焼亡之趣恐入奉<sub>二</sub>存候<sub>一</sub>、類焼者御一同之儀是非も無<sub>二</sub>御座<sub>一</sub>候、御多人数之御店皆々様無<sub>二</sub>御別条<sub>一</sub>御立退被<sub>二</sub>遊殊<sub>一</sub>に御土藏御手當成御行届被<sub>二</sub>遊候由<sub>一</sub>、目出度御儀奉存候、隨而家具百一人前田舎細工龜抹

之品ニ御座候得共、繼立飛脚宰領差添進上仕候、御当分に茂相立候者本望之至ニ奉存候、恐惶謹言  
また荷物催促として

早便を以一筆啓上仕候、向暑之節御聖勝被<sub>二</sub>成<sub>一</sub>御暮珍重奉<sub>二</sub>存候<sub>一</sub>、然者御案内被<sub>二</sub>仰下<sub>一</sub>候荷物今以<sub>二</sub>到着<sub>一</sub>不仕候而甚不都合之儀ニ御座候、尤飛脚屋衆江道中之様子無<sub>二</sub>油断<sub>一</sub>承<sub>二</sub>合<sub>一</sub>申候、此書狀着之上請<sub>二</sub>負方<sub>一</sub>御引合御歟并可<sub>二</sub>被<sub>一</sub>下候、手支<sub>二</sub>罷<sub>一</sub>成候處迷惑仕候、此後御下<sub>二</sub>之<sub>一</sub>荷物何卒御相對之所御究り可<sub>二</sub>被<sub>一</sub>下候  
との文章がある。火事見舞、荷物催促など一般に飛脚が使用されたのであらう。

# (5) 宮川嫩葉執筆「柏崎ちぢみ史」九〇頁

## (6) 通信博物館蔵。文化一一年甲戌春、成田重兵衛思齋述

「蚤飼絹飾大成」卷下(荒木幹雄・徳永光俊校訂「日本農書全集」三五卷四〇九頁)に「糸荷奥州より京へのぼるに、宰領老人に七駄ツ、ニかぎり支配する也」とあり、また嘉永六年癸丑冬、喜田川舎山述の喜田川季壯尾張部守貞誌「守貞謄稿卷之五」(喜多川守貞著、朝倉治彦編「守貞漫稿」上巻六八頁)に、飛脚屋として東海道の場合に「右ノ並便以下宰領ト云テ一夫ヲ馬四、五駄ニ附シ、途上掌之テ往来スル也、数駄ノ中一駄乗カラ尻ト云テ荷ヲ輕クシ、宰領其上ニ乗ル、並便ハ昼往キ夜ハ

必らず宿ス、十日限以下ハ晝夜往テ宿スル事無之、又特ニ火急ヲ報ズ書簡ニハ四日限仕立飛脚ト云アリ、是ハ常ニ無之、三都共ニ需ニ応テ發之、大概資金四兩計也、此仕立ニハ宰領ヲ附セズ、放テ贈リ兼テ每駅ニ得意ノ者アリテ掌之、每駅夫ヲ代ヘ續テ遣之、發日ヨリ必らず四十八時ニテ達之」とある。中仙道も似たものではあるまいか。(室松岩雄編「類聚近世風俗志」上九九頁参照)

(7) 高崎市編「高崎市史」下卷六一頁

(8) 波川市郷土史研究会覆刻本による。なお昭和九年刊、新潟市役所編「新潟市史」上卷九三八―九頁には、「弘化四年六月江戸・新潟間の定便日数は次の如し。

会津通 九拾三里 九日乃至十一日

信州路 百六里 七日

三国通 九十一里 六日

会津通の近距離なる割合に多くの日子を要せしは、宿駅の聯絡不便なると、人情緩慢たりしに依れるは前之を述べたり。

前項継飛脚・大名飛脚は幕府の公用又は藩の所用を辨ずるものにて、町飛脚は町家の用を辨ずる民間營業者なりしが、大名飛脚は專任を置かずして、町飛脚をして兼帶せしめ、少分の扶持を給與して藩用を辨せしめしもの多し。しかして藩用にて往来する際には道中は苗字帶刀を差許すを例とせり。当地の定飛脚藤田忠四郎の如きはそ

信州上田原町問屋日記にみえる定飛脚について(藤村)

の一人なり。 文政九年十月  
月座右記

飛脚賃は季節の好惡により春彼岸より冬至まで私領當時は延一里当り九拾八文、冬至より春彼岸までは百拾五文三分毫厘二毛なりしが、弘化四年改定、好季五拾四文、不良季には六拾四文に減じたりしが、尚江戸往返の経費見積額は相当額に上るを見る可きのみならず、僻陋辺境に至つては殆ど音信の便を絶し、然らざるも淹滞延甚しきは之を失ひ、終に梗塞せしむるものあり」と記るされている。

(9) 三井文庫蔵本。群馬県史編さん委員会編「群馬県史」

資料編10近世2六一九―二七頁に、深谷宿から杓掛宿までが抄録されている。

(10) 長野一九号二八―四三頁

(11) 通信博物館蔵

(12) 上州高崎について「定飛脚問屋願濟一件」(児玉幸多校訂「近世交通史料集」七卷四九二頁)に、安永二年の道中三度飛脚宿并取次所として高崎には嶋屋彦兵衛、近江屋藤八を記し、安中、妙義と連絡している。また天明七年迄の事を記した「島屋佐右衛門家声録」(「同右」七卷所収)に京屋について高崎關係記述は見当たらないから、天明八年から文化元年の間に成立したのであろうか。「高崎市史」下卷六一頁は、飛脚屋として「本市飛脚ノ始メハ享保三年ニシテ是ヨリ諸国ニ及ブト云フ、而シテ從來ヨリ当地ニハ飛脚嶋屋ノ出張アリ、後和泉屋甚

兵衛、江戸屋仁三郎、山田屋八右衛門、島田京屋ノ五軒アリシガ、明治五年三月ヨリ、島田吉三郎其權利ヲ譲リ受ケ、日々脚夫ヲ県庁ニ出シ、配達物ヲ引受ケ、又県庁ヨリ各町村ヘノ公用書類ハ無賃配達ヲナシタリ、後郵便法制定セラレ、民間受負全ク廃セラル」とある。

(13) 慶応義塾図書館蔵

(14) 越後国柿崎宿本陣問屋椿屋河端家文書(河端茂太郎氏蔵)には、「京坂参飛」(3.5×3.5センチ)の印を捺印し、「午ノ拾四番 越後三條飛脚年行司 椿屋孫四郎殿」と記した合印鑑がある。

(15) 「柏崎市史資料集」近世4四〇三・四〇九—一〇頁

(補1) 児玉幸多校訂「近世交通史料集」七卷四九七—八頁。寅十一月十五日付である。

(補2) 大森利球治・三沢勝衛「塩尻町誌」四六三頁に、

日本橋瀬戸物町幸八店

嶋屋佐左衛門

日本橋室町式丁目彦八店

十七屋孫兵衛

右之者共、近年三度飛脚荷物継立相滞段申立に付、吟味之上今般京大阪定飛脚問屋被申付、見世懸け看板も差免間、以来荷物江は定飛脚と認候焼印札を為持、宿々江も右札を渡置引合、宿場定之賃錢急度相払往返可致旨申渡候間、其方共宿々にても右之趣に相心得、右焼印札請取置引合無相違分は、定之賃錢請取、尤御用

物は勿論、其外之荷物も宿場到着之順次第不留置、宿人馬に不限、助郷馬に而も早速継送可申者也

寅十一月十四日 伊 豫 印

(天明二年) 遠 江 印

中山道板橋より守山迄

宿々問 屋

年 寄

川々役人共

(補3) 「同右」四六四—五頁。

(補4) 郵政省編「郵政百年史資料」一二卷一〇二—四、一〇七—九頁。触書案は次の通りである。

追テ此触書早々順達承知之旨別紙讀書相添留ヨリ宿村継ヲ以可相返事

通商三会社頭取開拓御用達兼 吉村甚兵衛

右ハ国内普ク信書物貨往復辦理東京ヨリ越後新潟迄宿村相對賃錢相拂時々飛脚荷物往復運輸之便ヲ相開度段間届候間宿村共正實ヲ主トシ過當之賃錢不貪精々早着相成候様可致世話モノ也

庚午七月九日 驛 遞 御 役 所

中山道板橋ヨリ追分迄夫ヨリ

越後国新潟迄右宿村役人

前同文言

越後新潟迄中山道高崎ヨリ三  
国通り越後新潟迄右宿村役人

〔後記〕

本稿の作成に当り、逕信博物館、上田市立図書館、三井文庫、慶応義塾大学三田情報センター、国立史料館、木村一郎、河端茂太郎氏は所蔵史料の利用を許可された。伊東弥之助、橋本輝夫、田中康雄氏のご好意に預りました事を感謝します。